

マルコによる福音書 6章 45節～56節

2016年2月25日

古本 靖久

1、聖歌 526番 「見つめることから 始めてゆこう」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 73 ページ）

4、テキストの位置

前回の場面、5000 人の供食では、将来おこなわれる神の国の祝宴の一端が垣間見られました。

マルコ福音書はイエス様を神の子として描いていきます。しかし弟子たちは、そのイエス様の真の姿に気づくことができません。

福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句

今日の場面も、神的存在であるイエス様が強調されます。食事の奇跡と今回の場面を続けて語ることによって、イエス様の神性を強く印象づけるのです。その出来事を、弟子たちは今回も間近に見るのです。

5、節ごとに

◆水の上の顕現物語

6:45 それからすぐ、イエス（彼）は弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間に御自分は群衆を解散させられた。

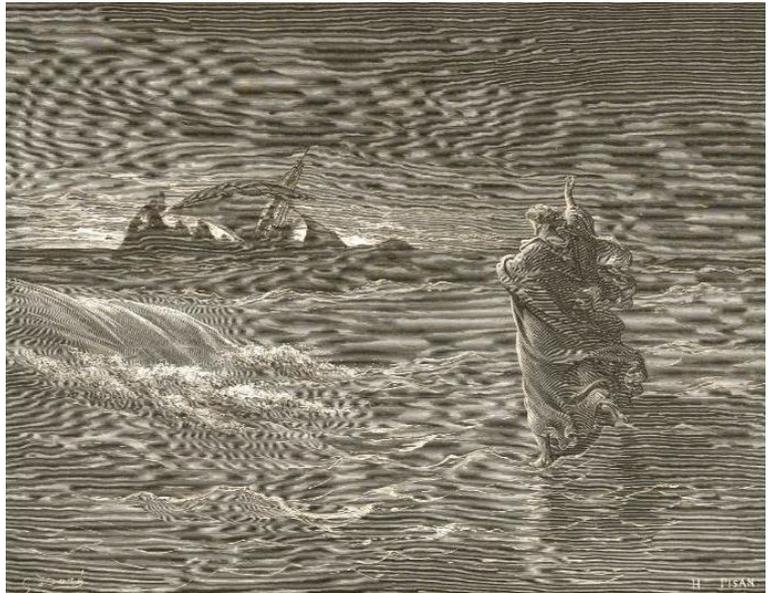
イエス様はパンの奇跡のあと、弟子たちだけを舟に乗せます。イエス様はこれまで弟子たちと行動を共にしてからというもの、舟にはいつも一緒に乗っていました。しかし今回、初めて弟子たちだけを舟に乗せ、向こう岸に行かせます。そこには試練が待ち構えていました。



6:46 (そして) 群衆と別れてから、祈るために山へ行かれた。

イエス様は、1章35節でも人里離れた所で祈っていました。重大な場面になると祈るイエス様の姿は、福音書の中に多く見られます。十字架の前のゲツセマネの祈り(14:32-42)では、イエス様は神さまのみ心を確かめるために祈りました。イエス様は神さまの意志に従って、この地で行動されるのです。

また山は、旧約聖書では荒れ野と同様、神さまと出会う場所として描かれます。モーセが十戒を授けられたのも山でした。



イエス様は何を祈っていたのでしょうか。 弟子たちを心配して祈っていたのでしょうか。それともご自分を待っているたくさんの人たちを思ってでしょうか。ご自分がどのように歩むべきか、神さまに尋ねていたのでしょうか。

6:47 (そして) 夕方になると、舟は湖(海)の真ん中に出ていたが、イエス(彼)だけは陸地におられた。

夕方になりました。正確には日没後、すっかり暗くなってしまった状態をあらわします。視界もかなり悪かったのではないのでしょうか。

福音書は弟子たちの舟が「海の真ん中」に出ていたと書きます。つまり弟子たちは、岸からもイエス様からも離れてしまっていることが強調されているのです。

ここで海について、少し触れておきたいと思います。海は死の象徴とされていました。最初の海である深淵は秩序を持たず、混沌としていました。そして人々が地上に住みだした後も、海は不気味な存在で、すべてを飲み込んでしまうと考えられていました。

ヨルダン川でおこなわれていた洗礼は、水の中に全身を沈めます。それは死の中に一度身を沈め、引き上げられるということを意味します。弟子たちの舟は、四方をそのような水に囲まれていました。

6:48 ところが（そして）、逆風のために弟子たち（彼ら）が漕ぎ悩んでいるのを見て、夜が明け（の第四警時）ころ、湖（海）の上を歩いて弟子たち（彼ら）のところに行き（来る）、（そして彼らの）そばを通り過ぎようとされた。

新共同訳で「夜」と訳されている語は、「第四警時」という言葉です。第四の守衛が守る時間をあらわし、だいたい午前3時から午前6時の間をあらわすそうです。

日没後と書かれた時間が夜8時だったとしても、弟子たちは7時間、海で漕ぎ悩んでいたことになります。彼らの気持ちはどのようなものだったのでしょうか。真の暗闇の中、どちらに向かって漕いだらよいのかもよくわからない。舟を安定させるだけで精一杯で、目的地に向かうことなど考える余裕もないわけです。

この場面を、わたしたちは自分たちの過去の体験と重ね合わせて考えてみたいと思います。それまで順調に歩んできたと思っていたのに、突然暗闇に包まれ、荒波と嵐によって沈みそうになる。舟を漕ごうにも進むことが出来ない。それどころか、どこに向かって漕いだらよいのかわからない。

そこで助けに来てくれるのが、イエス様です。しかし聖書は、不思議なことを書きます。イエス様は「そして彼らのそばを通り過ぎようとされた」のです。

この場面に違和感を抱かれる方は多いと思います。「どうして助けに来てくれたはずなのに、行っちゃうの？何でだす。びっくりポンやわ」となるのではないのでしょうか。

ここで今日のこの箇所の小見出しを、もう一度見てみたいと思います。「水の上の顕現物語」、そのように付けしてみました。イエス様が通り過ぎるというイメージは、実は神さまの臨在をあらわすものなのです。

旧約聖書でも出エジプト記33章19、22節や34章6節で、神さまはモーセの前を通り過ぎることによって、その臨在を示しました。列王記上19章11節にも、通り過ぎることによって臨在を示す神さまの姿が描かれます。過越の場面もその1つといえるでしょう。

つまり、イエス様が弟子たちのそばを通り過ぎることによって、弟子たちは神さまの力が彼らの間に介入したことを知るのです。つまりこれは、顕現物語だとも言えるのです。

イエス様が舟に近づいて来た第一の目的は、嵐を静めることではありませんでした。弟子たちの信仰を試みるために、イエス様は舟を漕ぐようにと命じられたのです。“霊”によってイエス様が荒れ野に行かされ誘惑に遭われたように、弟子たちはイエス様の命令によって試練を受けたのです。

6:49 弟子たち（彼ら）は、イエス（彼）が湖（海の）上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。

旧約聖書の中で、神さまは嵐や海の支配者として描かれています。そして今や、イエス様も海を支配し、その上を歩かれます。

しかし弟子たちは幽霊だと思い、大声で叫びます。相変わらずイエス様とは何者なのかを理解できず、その信仰の弱さが暴露されるのです。

たとえ奇跡を目の当たりにしても、信仰が確実に生まれる保証がないのです。

6:50 （というも）皆はイエス（彼）を見ておびえたのである。しかし、イエス（彼）はすぐ彼らと話し始めて、「安心しなさい（しっかりしろ）。わたしだ。恐れる（な）ことはない」と（彼らに）言われた。



おびえる弟子たちに対してイエス様は、「わたしだ」と言われます。モーセが神さまに名前を尋ねたときに、「わたしはある、わたしはあるというものだ」と神さまは答えました。「わたしだ」という言葉は、神さまの自己啓示でもあるのです。

マタイ福音書にはこのあと、自分も水の上を歩きたいと申し出るペトロの姿が描かれます。マタイ福音書において、ペトロは天の国の鍵を与えられるなど優遇されています。その関係もあると思われます。

6:51 （そして彼らの元に来て）イエス（彼）が舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たち（彼ら）は心の中で非常に驚いた。

ようやくイエス様は舟に乗りこみます。前に嵐を静めた箇所では風や海を叱りましたが、ここでは乗り込んだとたんに風が静まります。

イエス様は舟に乗り込みました。そのときにすべては静まります。わたしたちの心もそうではないでしょうか。イエス様が共にいないと感じるとき、わたしたちは怯え、不安に震えます。しかし共にいるイエス様を感じることができたときに、心は平安になるのです。

しかし弟子たちは、なおも驚き、混乱してしまいます。

6:52 パンの出来事を理解せず、(その)心が鈍く(かたく)なっていたからである。

弟子たちの心はかたくなっていました。手が萎えた人をいやす場面のファリサイ派がそうであったように(3:5)、また出エジプトの時のイスラエルの民がそうであったように、彼らの心はかたくなだったのです。

ではパンの出来事とは何を意味するのでしょうか。彼らはその手で、5000人の人たちにパンと魚を配りました。そしてその屑を12の籠いっぱい集めました。イエス様が共にいてくれたから、その奇跡を行うことができたのです。

しかし彼らの心はかたくなりました。神さまのみ手が伸ばされたことを信じるができなかったのでしょうか。それよりも、自分たちの力で何でもできると勘違いしてしまったのでしょうか。しかし彼らだけでは、舟を漕ぐことは出来なかったわけです。



◆まとめの句

6:53 こうして(そして)、一行(彼ら)は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。

ここから3節には、ゲネサレトでの出来事が書かれています。当初の目的地ベトサイダとはずいぶん違う所に来てしまいました。ゲネサレトはガリラヤ湖の西岸で、温暖で美しく、果樹がよく育つ場所だそうです。

6:54-55 (そして)一行(彼ら)が舟から上がると、すぐに人々はイエス(彼)と知って(を認めて)、その地方をくまなく(のいたるところを)走り回り、どこでもイエス(彼)がおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。

しかしそのような美しい場所にも、イエス様を必要とする人たちがたくさんいました。その人々は地方中を走り、イエス様の元に病人をつれてきます。ここでまた、イエス様の人気が強調されています。

6:56 (そして) 村でも町でも里でも、イエス(彼)が入って行かれると、(彼らは)病人を広場に置き(寝かせ)、せめてその服(衣)のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた(救われた)。

この場面を見ると、イエス様は本当にいろいろな人をいやしたことがわかります。中風の男性をいやした場面や、衣の裾に触れる女性をいやした場面が思い起こされます。

彼らは救われます。これは宗教的な救済ではなく、「明日から生きていける」という意味です。人々はイエス様の元に来て、次の日も歩んで行ける力をもらいました。しかしここでは、彼らの信仰については触れられていません。人々はイエス様のことを、「何者だ」と感じていたのでしょうか。

<今日の箇所から>

今日の場面を読むときに、わたしたちは水の上を歩く不思議な力に目を向けてしまいがちです。しかし大切なことは、イエス様を通して神さまの力があらわされ、わたしたちの所にやってきたということです。

わたしたちは不安の中で、人生という荒波に漕ぎ悩まされることがあるかもしれません。イエス様がそばにいてくれないと感じ、暗闇に佇んでしまう、そのようなこともあるでしょう。しかしイエス様は必ず来てくださるのです。「安心しなさい。わたしだ。恐れるな」。この言葉は必ず、わたしたちの心に届けられるのです。

教会はしばしば舟にたとえられます。礼拝堂の天井を見ると、まるで舟をひっくり返したような構造になっています。2000年の間教会の人たちは、自分たちが命じられた言葉どおりに、舟を漕ぎ出していきました。何度も苦しいことがあったでしょう。

しかしその度に、彼らはこの物語を思い出していたのではないのでしょうか。自分たちは決して一人ではない。イエス様が必ず共にいてくださる。そのことを心から信じ、歩んで行ったのではないかと思います。

わたしたちもそのような信仰を持ちたいものです。何度も恐れるかもしれません。その度に、「そうだ、イエス様がいてくださるんだ」と気付いていけたらと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は3月24日(木)10時30分からです。「ファリサイ派の人々、律法学者との論争」(マルコ7:1~13)について学んでいきます。